

連載 私の町はどんな町⑧

熊谷市(熊谷宿)

熊谷宿は天保一四年の記録では、人口三二六三人、家数一〇七五軒で、中山道では三番目に位する宿構成で、史跡も多く残されていました。昭和二〇年八月十四日(終戦の前夜)の空襲で市内の七割以上が灰燼に帰して、日本の規模を誇る一六〇〇坪の地に七〇〇坪の家屋があった竹井本陣をはじめ、宿場旧構の大半が焼失したのは残念でした。武蔵国の中山道十ヶ宿のうち、他は天領でしたが熊谷宿だけは大名の所領に属し、忍藩松平下総守の管理下にありました。

熊谷宿は熊谷次郎直実一色です。JR熊谷駅前には馬上颯爽と鎧かぶとに身を固めた直実の銅像があり、熊谷の花も実もある武士道のかおりやかたかし 須磨の浦風 一首が台座に彫り込まれています。 国道の右側に大里郡の総鎮

守で直実も深く尊信した『高城神社』があります。一の鳥居から三つの鳥居が並ぶ約一五〇米の参道は明神大門と呼び、当時は門前町として栄えていたといえます。 高城神社の横に直実ゆかりの『熊谷寺』があります。直実が生まれた熊谷館に一二〇五年に「蓮生庵」という草庵を造り、死後幡階上人が蓮生(直実の法名)を慕い中興して熊谷寺としました。

本堂左側に熊谷直実の墓があり、入口に「蓮生墓承元元年九月四日ここに寂滅す」と書かれ、直実の左に夫人相模の方の墓、右に嫡男小次郎直家公の墓があります。 山門の左に、直実五十四才頃の真白で巨大な「蓮生坊大霊像」が建っていて台座は武士時代に用いていた「劔星兜」が型どられています。

熊谷次郎直実の出自は、源氏の武将として平家追討に活躍したイメーが強いけど、始祖を桓武天皇に仰ぐ平家の一門です。熊谷姓は父直貞からで、父直貞と直実の兄は、

都時代の軋轡が因で、平忠盛

の刺客に殺害され、当時二才だった直実は逃げ延びて、母と二人で母の姉の嫁ぎ先で熊谷在住の久下直光を頼り、少年時代を過しています。 後の一ノ谷合戦で、直実に殺された平敦盛は忠盛の孫だったことは、何かの因縁の絆があったのでしょうか。

熊谷次郎直実として歴史に名を出すのは「平治の乱」一一五九年で直実が十九才の時です。平家の全盛時代で武蔵守の平知章の輩下になりました。一一八〇年源頼朝が伊豆で挙兵した時、彼は熊谷から平家の為に石橋山の合戦に馳せ参じています。

熊谷家の家紋「ほやに白鳩の紋」に関するエピソードがあります。石橋山合戦の最中頼朝が敗れて空洞の中に隠れていたのを梶原景時が助けた話は有名ですが、「直実物語」には、直実は敵將頼朝が栗の木の間隙の中に隠れているのを発見し憐れに思い、その前にほやを折って隠し「その幹に居候えば、鳩がその木のまわりに飛び来たり飛び去れば人のあるとは思わず知らずして

云々」とあり頼朝は助かり、後にその忠義により「ほやに白鳩の紋」を賜ったと云われています。また熊谷氏の子孫であるといわれている日本一地価が高いことで有名な東京銀座の「鳩居堂」は「向かい鳩」の家紋とし、屋号も鳩居堂としています。

頼朝の二度目の挙兵で、頼朝の配下に加わり一ノ谷合戦まで数々の活躍をしています。中でも我が子小次郎と同年齢の平敦盛の首を泣く泣く討ち取り、義経に頼み恩賞の代わりに敦盛の首を屋島の母「藤の局」の下に送り届けました。直実の情けある武士としての片鱗がうかがえます。

「平家物語」では「それよりしてこそ熊谷が発心の思いはすすみけれ」と記し、直実の出家の原因としています。直実はその後は戦はず、直ちに故郷の熊谷へ帰ってしまします。

翌年、法然上人に逢い、往生のあり方を悟り法然の門に入り、五十三才にして『熊谷蓮生』が誕生します。

小島 次郎

ISO9001・14001に裏づけされた高品質な
工事と誠実なアフターケア環境にやさしい
リニューアルを提供します。

本社 川崎市川崎区大川町8-1

TEL 044-366-4807(営業部)

FAX 044-366-4810

URL <http://www.sinyo.com>



ビル・マンション等のリニューアルはシンヨーにお任せ下さい。

シンヨー株式会社